

第二回 緑宝寺の盤印

一

さて、むかしのはなしであります。

いまで言つところの中国の西の方、岩だらけで人も少ない荒れた土地に、いつごろからか、一つの小さな森ができました。

この森、はじめは小さな緑の塊のようでありましたが、時が経つにつれて大きくなり、ついには辺りの岩山を覆い尽くしてしまいました。

森には、多くの虫が集い、鳥がかよい、けものが見つき、やがて、そのまわりに人が落ち着きはじめます。

人々は、その森の縁で薪を取り、獣を捕まえる日々を送つておりました。しかしながら、かれらも森のなかへは行こうとしません。行こうとすると、なぜか突然恐怖に襲われて、先へ進めないのです。

いつしか、その森は『神農の森』と呼ばれるようになりました。

神農といひますのは、古代中国の神様のひとりで、農業と薬の神様であります。ある日のこと、村の若者が重い病気にかかり、助かる見込みがなくなつたとき、試しにこの森のはずれに寝かせておいておいたところ、数日後には歩いて村に帰つてきたことから、疑い深い者達も、この名を信じざるをえなくなつてしまいました。

この男、その時のことをこう語つております。

『熱にうなされながらぼんやりと辺りを見回していたらよ、森の奥から、白い服を着た大柄の男が出てきたんだ。そばまで近付いてきて、何度か胸の上の手のひらがざしたら身体中がスツと楽になつちまつた。声が出せるようになったんで、「神農様、ありがとうございます」と言つたら、相手は笑つてこう言つたよ。「私たちも忙しいから、いつでも治してあ

げられるわけではない。あまり人には話さないように「つてな」

以来、「神農の森」は「聖森」としてだけ呼ばれ、神農の名は出されなくなりました。しかし、「聖森」の名を呼ぶとき、かれらの心の中には、いつでも「神農」の名があつたのです。

「聖森」は神様の別宅で、そのお友達、あるいは神様に近付けるほどの偉い仙人様が立ち寄られる場所なのだ、かれらは信じておりました。ですから、たまに妙な人が森の中へ入って行っても、特に詮索もせず、むしろ心中では歓迎さえしていたのです。

森の中に住んでいたのは、実は神でも仙人でもありませんでした。とはいえ、ただの人間と言うわけでもまたありません。かれらは自らを「術師」と呼び、この森に囲まれた建物を「緑宝寺」と呼んでおりました。

むかしのはなしであります――

その日、泉碓は疲れた体を引きずりながら、緑宝寺へやってきた。

いつもの通り門を抜け、そのまま部屋へ向かおうとする彼を、門番がひきとめる。

「泉碓どの、緑宝寺がお呼びですが」

呼び止められた方は、ちよつと首を傾げた。

（ここところ、直々にお呼びがかかるようなまねなんか、してないはずだがなあ…）

ともかく、相手はこの緑宝寺の長。呼ばれているなら出向かねばならない。彼は門番に礼を言つと、中堂へと向かった。

中堂は、緑宝寺をはじめとする最高師範格の者たちの在所と、集会場を兼ねた場所である。先の戦いで空魔を封じて以来、集会場として使われたことはないので、泉碓もその中には詳しくない。大きな扉をそろそろと開け、中の様子を伺つと、奥から軽や

3 第二回 緑宝寺の盤印

かな声が響いた。

「来ましたね、泉碓。さ、早く入って」

第十五代緑宝寺、空諾は、しなやかな体に軽くよく通る声、決して飾らない口調と身支度で有名である。弱冠十三才で緑宝寺になった彼は、現在二十才。最高師範位の術師たちより遙かに若い彼をそれでも慕う者が多いのは、その性格によるところが大きかった。

泉碓は扉を後ろ手に閉めると、礼をとる。

「碓術師範、秀泉碓。命により参上つかまつりました」
空諾は軽く微笑むと、席を立ち、泉碓の前まで歩いて行った。

「仙道との交渉、苦勞さま。さあ、とにかく座って」

客は空諾に導かれて、上席につく。

「さて、と……」

緑宝寺が定席につくと、話しを切り出した。

「帰った早々に呼び出して悪いんだけど、妙漣どのと雷遊子の様子を聞きたいんだ。見てきた限りでい

いから、話してもらえないかな」

泉碓は少し肩をおとし、ため息をついた。

「変わりませぬね、緑宝寺どの。もう少し命令口調にして頂いた方が、こちらとしても、やりやすいのですが……」

「まあ、いいから、いいから」

あくまでも明るい声である。泉碓は再びため息をついた。

実のところ、空諾がここまで気さくな面を見せるのは、ごく一部の者にたいしてのみ。現に妙漣のことは『どの』『つけで呼んでいる』、他の最高師範格の者たちや、若い術師見習いたちと話すときには、それなりの威厳と言つか、そういったものを漂わせてはいる。……だが、泉碓ほどに世間の波にもまれた者から見ると、どうしても甘さが目立っているように見えるのである。

とはいえ、彼、空諾を見かけだけで判断してはなら

ない。先代の緑宝寺、影焼えいしょうに拾われてからわずか一月で押さえ方の術師となり、一年後に最高師範、その直後には緑宝寺代行にまでなった彼の術には、誰も逆らうことのできないものがある…そのことを、誰よりもよく心得ているからこそ、泉碓のため息は妙に重いのである。

大きくひと呼吸して、泉碓は話しはじめた。

「雷遊子の調子は上々のようです。特に『靨』かくの境界においては、師の妙漣すら及ばないほどとか」

へえ、と空諾。

「すごいね……妙漣どのと言えば、むかし、あなたと組んでいたときには守りの専門家だったんでしょ？、それをも凌しのぐとなると…」

「はい。…ただ、まだ幼いこと、もともと素質があまりすぎることから『閃』せんではなく『明』めいに頼る傾向があります…」

術師の術と言うのは、かれら言うところの『光』こう（目に見える光と区別するため、『光雷』こうらいと呼ばれる場合もある）を使って行うものである。

『光』は、大きく二つに分けられる。すなわち、人の中にある『内光』と、世に不偏的にある『外光』である。術師は、『内光』をある特定の形に動かし、『外光』を変化させることによって、様々な術を使うことができる。

『閃』と『明』というのは、この『内光』の状態を表すもので、その人が本来持っている『内光』の量を『明』、術を使うときに、集約される『内光』の強さを『閃』で表す。実際の術の強さを決めるのは『閃』なのだが、『明』があまりにも多すぎる場合には、十分な『閃』がなくても、強い術を使える場合がある。雷遊子は、この希まれな部類に属するのである。

「…そのため、ちょっとした事件に巻き込まれてしまったようですが…」

5 第二回 緑宝寺の盤印

「ああ、それなら知ってるよ」

空諾の声が、少し重くなる。

「つい二、三日ほど前だけど、哨朔しやうしやくを使いによこしたんだ。なんでも、『天地封殺てんちほうかく』を封じたいとか言うてね。で、いろいろと聞いてみたんだけど…あれは一種の事故じゃないのかなあ…」

「私もそう思います。性格でしょう、あの悩みやすいところは」

二人は顔を見合わせて、やれやれといった表情になった。

「ま、雷遊子らいゆうこが順調なのがなによりだね。じゃ、すまないけど泉碓いずみづゑ、ひと休みしてから、もつひと働きしてくれないかな」

泉碓、すつくと立ち上がり、礼を取って

「は、喜んで」

その態度に思わず苦笑いしながら、緑宝寺は奥へさがった。再び出て来ると、その手に小さな袋がひとつ。

「君の弟子のうちの誰かに、これを妙漣めうれんどのに届かせて欲しいんだ…まあ、悩みよけてとこだね」

言いながら相手に渡す。泉碓が中身の感触を確かめるように触っているのを見て、空諾が楽しげに言った。

「念のために言っておくけど、その袋は妙漣どのにしか開けられないよ。」

あなた自身には、別の仕事を用意してる。あまりいい役でなくて悪いんだけど……」

泉碓は、自分の役割を聞いてわずかに顔色を変えた。

三

緑宝寺を離れること、六百里あまり。都とは比べるべくもないものの、なかなか活気のある町に、妙漣めうれん師弟がやって来て三日ほど。泉碓から連絡があり、この町で落ち合う事になっていたのだが…約束の日から二日がすぎてても、なんらの音沙汰もない。

待つこと自体はさほど辛くるくもないが、その相手が

泉碓となると話しは別。『奇策の泉碓』などという二つ名を持つ彼ではあるが、少なくとも自ら約束したものを違えた事は一度もない。妙漣が心配になるのも無理からぬことではあった。

心配ごととはもう一つある。弟子の雷遊子である。

術師としては飛躍的な進歩を遂げているものの、まだ七つ八つの子供。他人の死に直面して耐えるのはそうたやすい事ではない。ましてや、その内の一人で、実の姉のように慕っていた麗鈴に至っては、自分のせいで殺してしまったも同然……となれば悪夢にうなされたからと言って、誰が責められるだろう？

弟子に余計なことを考えさせないようにと、宿中でも修行は続いていた。

部屋の中央に立てられた一本のろうそく、その炎が、風もないのにふっ、と消える。いや、よく見ると消えたのは炎だけではない。先端のろうと芯が、丸ごと

消えているのである。

じじじ……と、わずかに火の燃える音。それは、妙漣の手のひらで幽かにゆらめく、ろうそくの先端だった。それを、部屋の隅にいる弟子の方に近づけ、『やってみろ』と目で指図する。

だが、弟子は動かない。師は手の炎を握り潰し

「雷、お前の『殻』の結果は本当に見事だよ。それに関する限り、いま対抗できるのは緑宝寺の、いわゆる『空諾の絶壁』しかない」

そばで冷たくなった茶を、くい、とあおる。

「だが、なぜ攻撃が出来ない？ 守りのみで勝てる戦はないぞ」

じろり、と問いかける目をはずし、雷遊子はつむいたまま、ぼそぼそと

「いいんです。ぼくは、結果だけで」

師は軽くため息をして、

「結果だって、使う人が使えば強い武器にもなる。いいか雷遊子、争いはいつ起こるかわからん。いつお

7 第二回 緑宝寺の盤印

前や私が危機に落ち入るかも知れないんだぞ。

……先日『天地封殺』を封じたるように求めたが、これが聞き入れられれば、私はほとんどの術を使えなくなる。」

弟子が顔をあげた。きよとんとしている。

「言つてなかつたかな。私の源流としての術は、以前大役を降りたときに、その大部分を封印してしまつたんだよ。今までお前が見てきたのは、ほとんどが剛流こうりゅうの術だ。」

「そんな…それじゃ、ぼくは剛流の術師になつちやうの!？」

妙連は首を振つた。

「源も剛も、同じ衝派だ。基本は同じなのさ。ただ得意な分野が違うだけだな…ん?」

部屋の中で、『風』が揺れた。誰かが、風に乗つて来る証拠だ。

『光』がただの光でないように、『風』も普通の風

ではない。この世をくまなく流れ続ける、風のごとき光『風光』の道。それと一体に——『乗れ』れば、瞬時にして数十ないし数百里先まで飛んでゆくことができる。……ただし、行く先はまさに『風』まかせではあるが。

妙連はとつさに『圧風』の型を作つて待つた。相手が何者であろうとも、『風』から出てきた瞬間ならばこれで押し戻せる。

しかし、術を使う必要はなかつた。風から出てきた人物は、すぐさま源流の正式な礼をとつたのである。

「妙老師、お久しぶりでございます。」

聞き覚えのある女性の声。その主は、十五、六くらいの小柄な少女だった。

「緑宝寺よりの急の使いですので、不作法をお許しください。」

「李姐しじょう!」

見知つた少女の顔に、思わず、雷遊子が飛び付いた。

「やあ、李二娘か、久しぶり」

李と呼ばれた少女は、雷の頭を撫でながら、

「積もる話もありますけど、まずは仕事を片付けなくちゃいけませんわ。…さ、雷ちゃん、ちよつとはなれてね」

少女は雷を脇へよけると、懐からひと包みの袋を取り出して、妙漣に渡した。

妙漣が袋を受け取ると、手の平の上でそれは勝手にほどけた。中に入っていたのは、竜の文様がほどこされた小さな円盤に、ひと巻きの竹筒。

その円盤を見て、妙漣と少女の顔色がさつと変わった。

「まあ…これは…!」

「盤印だ、緑宝寺盤印…四代の呪具…!」

興奮する二人をかわるがわる見て、雷遊子は首を傾げながら

「何なの、これ…?」

おや、と弟子をみながら、

「そうか、お前にはまた言っただけな。まさか、この目で見ることになるとは、思ってもみなかったからなあ……」

これは、緑宝寺の盤印と言つて、緑宝寺が代役をたてるときに使うものだ。第四代緑宝寺の御代に作られたので、四代の呪具とも呼ばれるが…今の十五代に至るまで、使われた事は二度しかない。それも、緑宝寺が自ら空魔討伐に出るため、次代の緑宝寺に手渡したというだけで、緑宝寺になるべき人以外に渡されたことはないんだ

「それじゃあ、老師が次の緑宝寺?」

期待に満ちた顔に、思わず妙漣は苦笑した。

「いや、なれない。…資格がないからな。しかし、それを承知の上でこれをお貸し下さるとは……」

「緑宝寺が心底、妙老師を信頼している証拠ですわ」
少女の目が細まった。『悩みよけ』ってこういう意味だったのね…

9 第二回 緑宝寺の盤印

印をじつと見つめていた妙漣の手から、竹簡が落ちた。拾い上げて眺めていた顔が、急に真剣になる。その変化を見て、少女がたずねる。

「妙老師、緑宝寺さまからはなにか…?」

「おまえな、『老師』はやめるよ。おれはもうおまえの師じゃないんだぞ」

少女はただにっこりと笑って応える。師のほうも、どうやら何を言っても無駄と悟って、

「簡単に言つとだな、次の戦いでは盤印を使いたいから、使い方を教えてもらつてこい、つていうことらしい」

「教えていただく、ですつて！老師にわからないものを、誰に聞けつて仰しゃるんです!?!」

突然の剣幕に、師の方が気圧けあつされた。どうやらこの娘にとつて、妙漣以上の存在などあり得ないようであった。

「この文が間違つてなければ、『北岩ほくがんの術師』とやらが知っているらしいな」

「北岩…聞いた事ありませんわ。泉老師ならひよつとするとご存知かも知れませんが…」

これを聞いて、妙漣はわずかに安堵あんどした。本来の師——泉碓より自分を上に置いているようなら、これは大問題である。

「おまえが知らないなら、泉碓も知らないさ。…ま、いまの緑宝寺はいいかげんな事を言うお方じゃないから、書いてある通りにしたほうがいいだろう」

読み終えた竹簡をじゃらりと、やや乱暴に丸めたあとで、妙漣は妙な感じを受けた。なにか、まだ続きがあるような…。試しに、竹簡を思いつきり開いて見たら、最後のほうに何かを感じる。両手でその部分を持つて見ると、しつかりとした竹の板から、薄皮のようなものはらりと、と剥がれ落ちた。ぱつと掴んで裏をかえすと、細い文字で一文。

——戦なくして、將は育たず——

「まったく、あの方らしいなあ…黙つていればわか

らないのに……」

ぼつり、とつぶやく師の様子に、少女は心配そうな顔になった。

「どうかなさったんですか、妙老師？」

「いや、その印を狙ってくる奴がいるかもしれないから、気を付けるってさ」

言いながら手早く薄皮を砕くと、奇妙なほど明るい声で

「ところで李二娘、すぐ緑宝寺へ帰るのかい？」

「いえ、しばらくこちらにいるように言われていますが、あの……」

困ったような声。妙漣ははたと膝を打って、

「そつか、すまん！一人で緑宝寺を出たってことは、きみも師範資格を取ったんだよな。……で、呪名は何と？」

「はい、いまは鈴術れいじゆつの師範で『泉麗鈴せんれいりん』を名乗っています」

雷遊子の体が、いきなり跳ね上がった。おびえた

ような目で彼女を見ながら、いやいやをするように首を振る。麗鈴が不思議そうな顔で近づくとすると、だつと奥の部屋に駆け込んだ。

残された少女は当惑ぎみに

「わ、私、なにか悪い事でも言いました？」

「いや、おまえのせいじゃないんだけど……」

口もとりながらも、妙漣は山裾の村での一件を話しはじめた。

四

寝室の奥に、雷遊子がへばりついている。麗鈴はそつとそばによつて、

「雷ちゃん……」

雷は麗鈴に背を向けたまま顔をあげた。

「李姐は、ちがうよね？」

「ええ、別人よ。でも、偶然とはおもえないわね」

泣き顔がゆつくりと振り返る

11 第二回 緑宝寺の盤印

「何があったかは、妙老師から聞いたわ」

「…ぼくが悪かったんだ。ぼくの術のこと、もっと言っておけば、お姉ちゃんはお姉ちゃんはおくをかばったりしなかった——」

涙に溶けるかのように目をつむろうとする雷遊子の顔を、麗鈴はぐい、と引き起こした。

「そうしたら、その娘のかわりに、あなたが死んでたわ」

「そんなこと——」

きつい目線を受け、雷遊子はもうそれ以上口を開けなかった。

「戦いを甘く見てはいけないわ。あなたの結果は本当に強いけど、無駄が多すぎるの。老師も言ってたわ。あれじゃ二刻ともたないだろう」って」

口を開けても、言い返す言葉がない。少年は唇を噛みながらうつむく。

「あの娘は死んで、あなたは助かった…これは、もう誰にも変えられないわ。…でもね、雷ちゃん。あ

なたはまだあの娘にしてあげられることがあるわ」

うつむいたまま、ぼそりと

「してあげられること…?」

「そう。あの娘はあなたを助けた。…いまはただ一人の人間を救ったにすぎないわ。けど、あなたがこれから多くの人を助ければ…そうすれば、彼女はあなただけじゃなく、もっともっと多くの人達の恩人になることができるの」

「でも……術師は人を殺すよ。どうして助けられるの?」

雷遊子の言葉は、質問と言うより、ただ自分を責めているように聞こえた。

「私たちが人を傷つけるのは、自分の身を護るため、仕方ない場合だよ。私たちの敵は空魔くまだけなんだから」

「どうして空魔を倒さなきゃいけないの?」

麗鈴は一瞬唖然あぜんとしてから、気を取り直して、
「雷ちゃんはなぜだとおもっ?」

「空魔の気による害を我等の許で留め、天下の太平を維持するため……?」

まさに棒読みである。少女はくすくすと笑って

「妙老師がそうおっしゃったの? 困った方ね。愛弟子の前でまで照れることないのに……」

ふう、とため息をひとつついて、雷の目をまっすぐ覗き込む。その眼光に、逸らすことさえできない。

「ね、雷ちゃん。空魔の気が強くなると、どうなるか知ってる?」

「えっと、たしか……竜の姿がぼんやり見えて、頭が殴られたみたいに痛くなって……」

「そうね、本人はそうなるわ。とつても苦しくて、たまらないものよ。でも、気に強い回りの人には、そんなことわからないの。気に当てられたのが、ちゃんとした大人なら、なんとか我慢もできるでしょうけど……もし、子供だったら……」

今までの強い眼光がうそのように消えて、なかば首を逸らす麗鈴。その姿に、雷遊子はたまらず聞いた。

「どう……なるの?」

「……捨てられるわ。『呪われてる』なんて言われて、ひどいときは、殴られて……声も出せないくらい……縛られたり……!!」

最後のほうは掠れ声。しばらく二人とも、ただ黙って相手を見つめていた。

「……妙老師は、そういった子供たちを拾って来ては、弟子にしていたわ。私もその一人よ。……それはね、老師自身もそうして拾われたからなの。でも、世の中にいるそんな子供たちを、一人残らず拾うことはできないわ。」

……空魔を倒さない限り、そんな子はけっしていなくなるならない。だから、空魔打倒のために術を磨いているのよ。少なくとも、妙老師と私は、ね」

雷遊子はしばらくうつむいていた。だが、やがて手の甲で顔をこすると、大きく吸った息を強く吐き出しながら、思い切った顔をあげる。

「わかったよ、李姐。ぼくもやる。老師や李姐と一緒に

13 第二回 緑宝寺の盤印

に、ぼくみたいな子供を世の中からなくしてやる！

……それで、お姉ちゃんも喜んでくれるよね……」

また涙で曇りそうな目を、我慢して開けている。その顔をそっと抱き寄せて、少女が言った。

「そうね…雷ちゃんが一人前になったら、きつとね」

一瞬みせた、寂しそうな麗鈴の表情に、雷遊子が気付くことはなかった。

五

雷遊子を寝かしつけて、居間のほうへ戻って来た

麗鈴に、妙漣が声をかけた。

「聞こえたぞ」

ぶすつとした声にも、麗鈴は一向にこたえない。

「いいじゃありませんか。うそは言ってませんよ」

多少いじわるな目線を師に投げかけながら、茶をいれる。師のほうはそれを軽くあおって、

「ま、あのくらいで納得してくれてよかった…あい

つこの体ことは、まだ言いたくないからな…」

「やっぱり、だめなのですか？」

心配そうな表情を見て、師の顔が締まる。

「七割がた、といったところだ。次に空魔があらわれるのが何年後か、はつきりとはわからないが…そのときに倒せなければ、おそらくあいつにその次はない」

「まあ…」

「自分の身を護るためには、なんとしても空魔を倒さなければならぬ…むしろ、そうはつきり言ったほうがいいのかもしれないなあ」

寝床をのぞきながら言う妙漣の言葉が終わりきらないうちに、麗鈴は口を挟んだ。

「いいえ、妙老師のやり方は正しいとおもいますわ。

あの子は、老師に似てます。だから…だから姉も、思わず庇かばったのでしょね」

少女の顔色がわずかに変わった。妙漣はそれを正視できなかつた。

「きみのお姉さんには、本当に申しわけないことをしたと思つている。すまない…」

目線をあわせることもできず、ただ頭を下げる師の肩に、麗鈴はそつと手を置いた。

「顔を上げてください、老師。…姉は老師のおかげで、普通の人として生きられました。感謝をしても、怨むわけありませんわ」

麗鈴はまた茶をいれた。今度の茶は、なかなかくならなかった。

六

明けて翌日。雷遊子はどうやら完全に吹っ切れたらしく、朝早くから外で駆け回つている。師のほうは、珍しくもやや遅れて起きだして、麗鈴が作った朝食をとる。と、ここまでは平和な朝の風景だったのだが…

饅頭まんじゅうを頬張りながら、ふと棚の上を見ると、昨晚

置いてあつたはずの盤印がない。麗がしまったのか、と思つて尋ねてみると、知らないと言つ返事。しかたなく食事を途中で切り上げ、印を探しまわる。

そこへ歸つて来た雷遊子

「なに探してるの？」

と、のんびり問いかける。

「印だ。あずかつた盤印をどっかやつてしまつたらしい」

「棚の上にあるの、違つなの？」

言われて棚を見上げる。が、印どころかほこり一つない。

「雷、いいかげんなことを言つな！」

師の剣幕にちよつと気後れしたものの、雷遊子も言い返す。

「だって、そこにあるじゃないか！ちよつと光つてるけど…」

「光つてる？」

師は、ちよつと考え込むと

「それなら雷、印を取ってみろ」

弟子は、棚の上で手を動かして、何かを掴んだ様子になる。そのまま振り向いて、妙漣の前へ。

「はい。これでしょ？」

「よし、じゃあ右の手のひらへ乗せて……」

雷遊子が右手を差し出すと、師はその上を指二本を乗せ、ヤツとばかりに気合を一つ。手の上には見る間に盤印があらわれた。

「『隠光界』……か」

「結果で隠すなんて……でも、いったい誰が？」

妙漣はその問いを全く無視して、ぼそっと一言

「二人とも、覚悟しとけよ。もうのんびりとはしてられないぞ」

言いながら振り返ると、雷遊子がない。

「……どこいったんだ、あいつ」

「雷ちゃんなら、なにか片付けてくるとか言っておもてへ……」

「……すばやい奴だな」

妙漣は呆れがお。弟子は楽しそうに

「雷ちゃんは、ほんとに妙老師の性格をよく心得てますわ。先ほどの言葉で、すぐにもこの家を出るつもりだと思つて、なにか忘れ物でも取りに言ったのでしょ？」

師は居心地いしこちの悪そうな顔をして、黙ってしまった。

と、いきなりおもての戸がバタンと開いて、となりのおばさんが駆け込んで来た。

「た、たツ、大変だよ！ お前さんの子供が、道の真ん中でいきなり消えちまったよ!!」

(しまったツ！ 奴ら、もう動きやがったか!!)

心の中で拳を叩きつける妙漣の目が、ふと違和感のあるものを捉えた。

「……ん？ おばさん、その木簡は？」

「え？ あ、これかい？ 子供と入れ代わりに出て来たただけどき、あたしにや読めないから持つて来たんだ」

「はい、と木切れを妙漣に渡す。かれはおばさんに礼を言つて引き上げさせると、それを読みはじめたが、すぐにわなわなと震え、憎々しげに地面に叩きつけた!!」

「どうしたんです、雷ちゃんはいつたいい!!」

麗鈴の言葉も、なかば震えている。しかし、師は口を開こうとしない。

うつむくその顔を下から覗きこむようにしたとき、妙漣はいきなりがば、と顔を上げた

「さらわれた。雷の命が惜しくば、盤印を持ってこいだと!!」

七

妙漣たちが呼び出されたのは、町の近くの河原だった。酒れかかった川の近くに、相手と思しき男たちがいる。

「ちゃんと印を持ってきたぞ、雷はどこだ?」

妙漣の叫びに、一人の男が前に出る。

「心配しねエでも、ちゃんとおるわ!」

指さす方を見ると、雷遊子が河原に立っている。いや、師の方に行こうとしているのに、何か壁のようなものにはばまれて、行くことができない様子。

「結石か!」

結石とはごく初歩的な呪具で、文字どおり境界術を封じ込めた石のこと。普通に使われただけなら、雷遊子でも破れたかもしれないが、よくみると、雷の回りには八つの結石が、正しく八方に置かれている様子。いわゆる『八方界』という手法で、これをやられると相当の術師であっても、崩すのは至難のわざ。

これは他に手がない、と悟った妙漣、苦い顔で、

「盤印はここにある。さ、雷を放せ!」

「その手に乗るかい。印を持ったまんまじゃ、あぶなくっていけねエ。まず、そいつをこっちに投げな、そうすりゃ弟子は殺さねエぜ」

17 第二回 緑宝寺の盤印

やむなく、印を投げる。今まで黙っていた男が、影からさっさと走りよって受け取ると、

「ほれ、狼兄イ」

と、印を渡す。

「さ、雷を返してもらおうー」

狼、と呼ばれた男、にやりと笑つと、

「印さえ手に入れば、おなえらなんぞ用済みよ。…死になッ!!」

ばつ、と印を掲げ、口中で何やら唱える。すると、妙漣と麗鈴の二人が、一言も発せず、その場に崩れ落ちてしまった。

雷が必死になつて壁に腕を叩きつけるが、外からはその音すら聞こえない。

「さ、引き上げっか」

「ちよつと待ってくれ、狼兄イ。念のためだ。とどめ刺しておいた方がいいぜ」

狼は、ちらと相手を見て、

「好きにしるよ。ただ約束は約束だ。あのガキは殺

すんじゃねえぞ」

「へいへい。ま、出らんなきや四、五日でお陀仏だ。それこそ余計な手間つてもんだあな」

言っている間に、狼は風に乗って行ってしまった。

一人残つた男は、腰の小刀をぬいて、ゆっくりと妙漣の方へ近づいてゆく。

八

さて、ここはとある山中に、自立たぬように作られた洞窟…と言つよりは城に近いもの。先ほど印を奪つた男が、この城の一室にやってきた。

「応師おんしどの、ただいま戻りましてござる」

声に応じて、奥の方で動きがあった。一段高い席についていた男が、すつくと立ち上がったのだ。

身の丈たて七尺しちせきはあろうかという割には細身。袈裟けさとも道服ともつかない服をばおり、頭から鼻までを赤い薄布で覆つといった、まことに奇怪ないでたち。

「例の印をお持ちしました。どうぞお検^{あつた}めを…」

さつと近づいてこようとする男を手で制し、手に入れたいきさつを聞く。が、話しを聞くことに首が斜めになり、ついにはぶつぶつとつばやきはじめた。「弟子たちのため、総師範の位^{くわい}さえあつさり捨てた男だ。いまさら身代わりになつたとて驚きはせぬが…」

その瞬間、異様な気配を感じた。出所^{でしよ}は見^まるまでもない。目の前の盤印に決ま^まっている。

「愚^{おろ}か者！ なにか仕掛^{しか}けられたな!!」

巨体を揺るがす叫びに、印を持った男が震え上がる。「衝派^{しやうは}の連中に、ここを見つ^みけられるわけにはいかん。それを持つて、すぐにその河原とやらへ戻れ！ 妙漣^{せうれん}と、その弟子たちすべてを始末^{しまつ}するまで、ここへの出入りはならんぞ!!」

狼はまさにほうほうの態^{たい}で、例の河原へと向かう風に乗^のっていった。

一方こちらは河原の男。

妙漣^{せうれん}まではあと数歩。まったく動かないその体を見て、なんとなく不安を感じ、いつきに飛び掛かろうと歩を早めた、その途端^{とたん}、ずでんツ、とひっくりかえってしまった。

「あ、足が…動かん!？」

「動くまい。こいつは俺の本呪^{ほんじゆ}だから、ちよつとやそつとじゃ破れんぞ」

びっくりして見上げた先には、何と、いまのいままで倒れていたはずの妙漣^{せうれん}が、にやにや笑いながら立っているではないか！

「俺の漣^{れん}術はさざなみの術だ。弱く見えても、絡^{から}めとられるともう動けん」

「くツ！」

怒りに任せて、妙漣^{せうれん}に刀を投げ付けようと腕を振り上げたその時、

19 第二回 緑宝寺の盤印

りりいいん

と、鈴の音ひとつ。と同時に、腕が言うことを聞かなくなる。いや、それどころか、身体全体がまったく動かなくなってしまった。

「鈴術は『光』を絡める術…なまじの力では、逃れられませんかよ」

と、こちらは麗鈴。男は齒噛みして、

「貴様ら、印の力にやられたんじゃねえのか！」

妙漣は思い切り笑って

「緑宝寺の秘法を、そう簡単に渡すと思ったのか？ あれはただ、お前たちの首に鈴をつけるための道具にすぎん。…ま、お前が残ってくれたんで、追っかける手間が省けたがな。さて、おまえさんたちの正体を言ってもらおうか」

「そんな必要はねえッ！」

妙漣師弟が振り向くと、風から降りたばかりの狼が立っていた。とっさに漣、鈴の術で絡めようとしたものの一歩遅い。狼が懐からさつと取り出した石

を投げ付けると、二人とも地面に這いつくばってしまつた。

「あ…『圧石』…!?」

「こ、こんなもので！こいつらいつたい…!?」

妙漣たちから少し遠く。雷遊子は、何とか師の加勢に行こうと必死にもがいていた。

しかし、押せど叩けど、体当たりさえ壁に跳ね返されてはどうすることもできない。…いや、そうだろうか？

雷は、師の言葉を思い出していた。結界術だって、使い方によっては武器にもなる…

「そうだ。ばくだって結界なら使える！…よあし、こんなもの、こわしてやる！」

雷遊子は自分の結界を張って、押し広げはじめた。だが、回りの結界は一行に動かない。

そうこうしているうちに、男たちが師にとどめを刺そうとしているのが目に入る。

「老師！李姐！！」

叫び声も、壁の中でむなしく跳ね返るばかり……

「……また……ぼくの目の前で……いやだ！……もういやだああ！！」

叫ぶ彼の手の先に、さきほど張った結界が集まっ
てゆく。いや、集まるだけでなく、見えるはずのな
い結界が、とんでもない光を発しているのだ。

雷はそれを、まるで掴むかのようにして腕を振り
上げ、そのまま思い切り振りおろす！

……するとどうだろう。いままでびくともしなかつ
た八方界が、まっぷたつになつたではないか！！

破れた結界を支えきれなくなつた八つの結石は、
粉々に砕けて宙に舞い上がった。雷の回りに降り注
いだ結石の粉は、彼の持つ強い『光雷』と呼応して、
黒くきらきらと光ながら彼を取り巻いていた

怒りに燃える雷遊子の表情とあいまって、その姿
はまさに雲を身にまとつた雷公のよう。結石の砕け

る音に驚いて振り向いた男たちも、これには度肝を
ぬかれた。

「な、なんだあれは!?」

ほんの一瞬、彼らの注意がそれた。圧石の力が、わ
ずかに弱まる。

これを逃す妙漣ではない。すぐさま得意の型を作
り、全力を注ぎこむ！！

「がッ！し、しまつた！」

男たちが気付いたときには、麗鈴の鈴術まで食らつ
たあと。もはや指の一本も動かない。

「いまだ雷、もう一度いまの術を……」

黒い雲がゆらり、と動いたかと思うと、敵に向かっ
てダツと跳んでゆく。頭の上にはさきほどと同じ、白
く輝く結界の塊。

「くツそあーガキなんぞに、や、やられて、たまつ
かあああ！！」

狼が渾身の力と光を振り絞って圧石を雷のほうへ
向けると、雷が白い光輝を投げ降ろすのがほぼ同

21 第二回 緑宝寺の盤印

時に決まった。

「圧石が砕け散ると、狼の体が半分消し飛ぶのも、ほぼ同時だった。だが、光輝はそのような細かなものなどまったく意に介さず、その持てる力を、大地に向けて振るっていた。

「やれ」と命じたとはいえ、そのあまりの凄まじさに茫然とする妙漣。はたと正気を取り戻すと、そこにあるのは、ただ巨大な爪痕。「尺」の単位では気が遠くなるくらいの大穴に、川の水が流れ込んで池となっている。澄みはじめたその水面には、血糊のついた布の切れ端がちらほらと浮かんでいる。

少し離れたところにいた麗鈴。ふとそばに人の気配を感じて振り向くと、そこに雷遊子がいた。心気が抜けたようにぼーっと立ち、ぼつり、と言つ。

「今度は、守れたのかな？」

「そうね」

麗鈴が、にっこりと笑つて言った

「これで、雷ちゃんは二人助けたわね」

雷は、微笑みを浮かべながらその場に倒れこんだ。

十

突然できてしまった池のほとり。師弟は、そこに座り込んでいた。

近くにある森の中から、ときおり鳥が水を求めに飛び出して来る。はるか遠い町の方から、物売りの声がかすかに聞こえる——ほんの少し前のことが、悪い冗談のようだった。

疲れて眠ってしまった雷遊子の頭を、麗鈴が膝の上に乗せてやさしく撫でてている。撫でながら、なんとも不思議な気持ちになった。これが、さつきあんな術をつかった子だなんて……

「老師、あの術は……？」

妙漣も、同じ気持ちだったのかもしれない。やさしげな表情をふつ、と隠して

「うん。やりかたからすると結界刃だが…とても刃
なんて生易しい代物じゃないな」

「ええ。まるで…まるで竜の爪みたい……」

夢見るような顔の弟子を横目で見ながら、師は顎
をさすった

「爪か、なるほど…うん、そつだな。なら『白竜爪』
とても命名するか。…こいつがはじめて編み出した
術だし、そのくらい派手でもいいだろ」

言いながらごろん、と横になる。どうやら、昼寝
を決め込むつもりらしい。「一人は無理ですよ」とい
う麗鈴の言葉に、じろりと目だけでやり返す。くす
くすと笑う弟子の顔からそらした目が、他に動くも
のを捉えた。

黒服に見を包んだ男が一人、こちらに向かつて歩
いて来る。夏の盛りでこそないが、早足で歩けば汗
ばむこの季節に、このいでたちは明らかにおかしい。
師の目の色が変わったのを見て、弟子の方もその男

に気付いた。

「新手でしようか?」

妙漣はあくまで起きよつとせず、

「無視だ。雷がこれじゃ、防ぎよつがない」

ほそほそとやり取りしている間にも、男は近づい
て来る。合わさるまであと十数歩、といったところ
で、黒服の男がいきなり手を合わせた。

「いかん! 麗、寄れつ!」

麗鈴が師につかまり、妙漣が雷を引つつかむや、一
陣の『風』が彼らを吹き飛ばした。

十一

「…い、雷、しっかりしろ!」

老師の言葉に目を覚ました雷遊子は、ふと下を見
て、師にしがみついた。

足元がなかった。飛んでいるのだ。いや、正確に
は跳ねていると言っべきか——宙へ舞い上がる速度

がどどん落ちている。あと少しで、落下に転じる
 だろうことは、まだ少年の雷遊子にも明らかだった。

「うん…下までほぼ二里^(里)、かな」

「お、落ちたら…」

「もちろん、おだぶつだ」

あくまでも平静な声が、かえって恐ろしく感じる。
 そして、落后感が上昇感にとって替わった。雷遊子が
 悲鳴を上げる。麗鈴は表情こそ変えていないが、師
 の腕を掴む手に力が加わった。

「心配しなくても、これがあるさ」

妙漣が右手にしっかりと握り締めているのは、例の
 盤印。

「で、でも妙老師、それは偽物じゃありません？」

「呪具も『盤印』くらいになるとな、そう簡単に使
 えちゃ困るんだよ。ちゃんとした使い方を知らなけ
 りゃ、こいつはただの円盤さ」

「いいから、止めるんでしょ、早く！地面についちゃ
 うよ!!」

雷遊子の引きつった叫びに、師は

「わかったわかった」

と、印を左手に持ちかえると、胸の前に置く。

「よく見てるよ。いいか、これがこの印の第一の力。
 私が知っている唯一^{ゆい}の使い方——封じた術を開放す
 る力だ」

雷遊子を抱えていた腕をはなし、印をしっかりと
 握ると、右手の指をそれに添え、目をつむる。

その格好を普通の人が見ても、ただ寝ているとし
 か思えないだろう。しかし、師に抱きついている二
 人にははつきりと見えた。印から発した『光』が、師
 の体をくまなく包み込んでいくのが…

「よし！」

かけ声と共に印を懐にしまいこみ、型を作り、ぶ
 つぶつとなにやら唱えはじめる。

「…天地分かれて後、天より落ちて地に至るは順法な
 り。地より天へ向かうはこれ反法なり。地より天へ
 向かいて法に反せざるもの、すなわち昇竜^{しやうりゆう}を置い

てなし。されば我、いま一度その力を拝借せん……」

型を決め、力を手に集める。すでに落ちる速度は、顔にあたる風が息苦しいまでになっていた。真下に見える緑のしみが森へ、蒼い筋が川へと変わってゆく。

「二人とも、しっかり掴まっているよ……昇・竜・界!!」

吐き出すような言葉と共に、両手のひらを真下に衝き下ろした。……と、ものすごい衝撃と共に、墜ちる速さが遅くなって行く! 三人の墜ち方はだんだんゆっくりになって行き……ついには空中で止まってしまった。高さは、地上から一丈あまり。

「降りるぞ!」

妙漣は言いざま、術を解いた。三人とも、そのまま一丈下へどすんと落ちる。

「いたたた……妙老師、もつとましな降り方はないんですか?」

妙漣は一言

「死ぬよりやましだろ」と、悪びれたふうもない。「あのひと、いなくなつたね」

雷遊子の言葉に二人が振り返ると、たしかにそこにはたしかに誰もない。気配すらも消えている。

「印が落ちるのを、待ちかまえているかと思つたのに……?」

師はぱたぱたと、服の袂を払いながら言つ。

「たしかにわからん奴だな。しかし……」

懐の盤印を確かめるように右手で握つて、一言。

「厄介な魚が喰らいついちまつたなあ……」

げっそりとした表情の妙漣を見て、弟子達が笑つ。

しかし、この表現がどれほどの確であるか、言つた妙漣でさえ気付いてはいなかつた。

十二

河原を見渡せる、ちよつとした丘。

わずかに下草がはえた程度の、固い地面の上で、一

人の男が妙連たちのことを眺めていた。寝そべるようにしているのは、おそらく下から見つけられないためであろう。河原の師弟を見張っているのは、誰が見ても明らかである。

宙に吹き飛ばされた彼らが、無事に降りるのを見届けたのち、彼は立ち上がった。

「やれやれ、驚かしてくれるよ、まったく」

身体中についた、土ほこりやら草やらをばつぱと払い落としながら、誰かに話し掛けるかのように、彼は言いつづける。

「『八方界』に『圧石』か。あんな素人しろうとに毛のはえたような奴だからよかつたが…あの黒服が持っていたらと思うとゾツとする。

しかし、あれほどの術師までもが盤印狙ってくるのか…これは、ちと宣伝しすぎたかもしれない……」

なおもぶつぶつと独り言を言い続ける彼——泉碓の足取りは、いやになるほど重かつた。

むかしのはなしである。

注

- 一 七尺…当時の一尺は約30cm
- 二 二里…一里は千八百尺。約540m